

庄・蔵本弥生石棺の型式学的位置

端野晋平

はじめに

徳島大学蔵本キャンパス内に所在する庄・蔵本遺跡では、これまで日本列島の先史社会の解明へとつながる貴重な資料を数多く提供してきた。そうしたものの一つに、箱式石棺がある。これは徳島平野では、灌漑水田農耕・弥生土器・大陸系磨製石器などとともに、弥生時代の始まりに導入される。これまでも、その系譜や背後にある社会について論じる際の素材とされてきた。しかし、とくに系譜については、十分な検討がなされないまま、言及されるにとどまっている。そこで本稿では、これまで筆者が行った研究の成果をふまえ、庄・蔵本遺跡の弥生石棺^{註1)}を型式学的に位置づけることにより、この問題により深くアプローチしたい。

1. 庄・蔵本弥生石棺の研究とその問題点

現状で庄・蔵本遺跡では、二つに地点に分かれて弥生時代前期の石棺墓2基が確認されている(図1・2)。一つ目は蔵本キャンパスの西南部に位置する第6次調査(青藍会館地点)の石棺墓1である。これは、1986～1987年に調査された弥生時代前期前葉～中葉の墓域(西墓域と呼称)に属する(北條編1998)。報告書では、この墓域で確認された配石墓・土壙墓・甕棺墓とともに、山口県土井ヶ浜遺跡などに類例が求められた。とくに側壁を積石でつくる点に、韓国の忠清南道南城里石棺墓との類似性が指摘されている(河野1998)。また、同書で北條芳隆は第6次調査地点の墓・副葬品と愛媛県持田町3丁目遺跡のそれらとの類似と差異を整理した。そのなかで石棺墓は持田町3丁目遺跡にはみられない差異点の一つにあげられた(北條1998)。吉野川下流域における弥生時代の開始を論じた中村豊は、第6次調査地点の石棺墓などの墓制・副葬習俗の類例を、北部九州・響灘沿岸(とくに響灘沿岸)に求めた(中村1998)。庄・蔵本遺跡出土朝鮮系無文土器を検討した橋本達也は、第6次調査石棺墓1を、石棺墓ではなく、石槨墓とみなした。そして、こうした墓制は朝鮮半島南部に系譜がたどれ、まず北部九州で採用されたのち、直接的な人の移動や交流などによって中四国へ波及したとする原俊一(1999)をふまえ、これが伝播した背景に人の移動を想定した(橋本2001)。徳島地域の弥生時代の墓制を検討した近藤玲は、第6次調査地点の石棺墓・配石墓・土壙墓・甕棺墓を取り上げ、そのうち配石墓・甕棺墓については北部九州を中心とした西方地域の墓制からの影響を認めた(近藤2002)。

二つ目は蔵本キャンパスの東南部に位置する1998年度立会(ボイラータンク地点)のSX01である。この墓が位置するのは、弥生時代前期前葉～末葉の墓域(東墓域と呼称)であり、付近では石蓋土壙墓や土壙墓などが確認されている。所属時期は弥生時代前期前葉～中葉の可能性が想定されている(端野編2018)。報告を担当した筆者は、庄・蔵本遺跡の石棺を、壁に積石を用いる点で、北部九州の石槨墓に系譜を求めつつも、墓壙床面に壁を立てるための掘り込みを有する例も確認されていることから、槨ではなく、棺の可能性が高いとした(端野2018)^{註2)}。さらに、列島西部の初期箱式石棺(緋

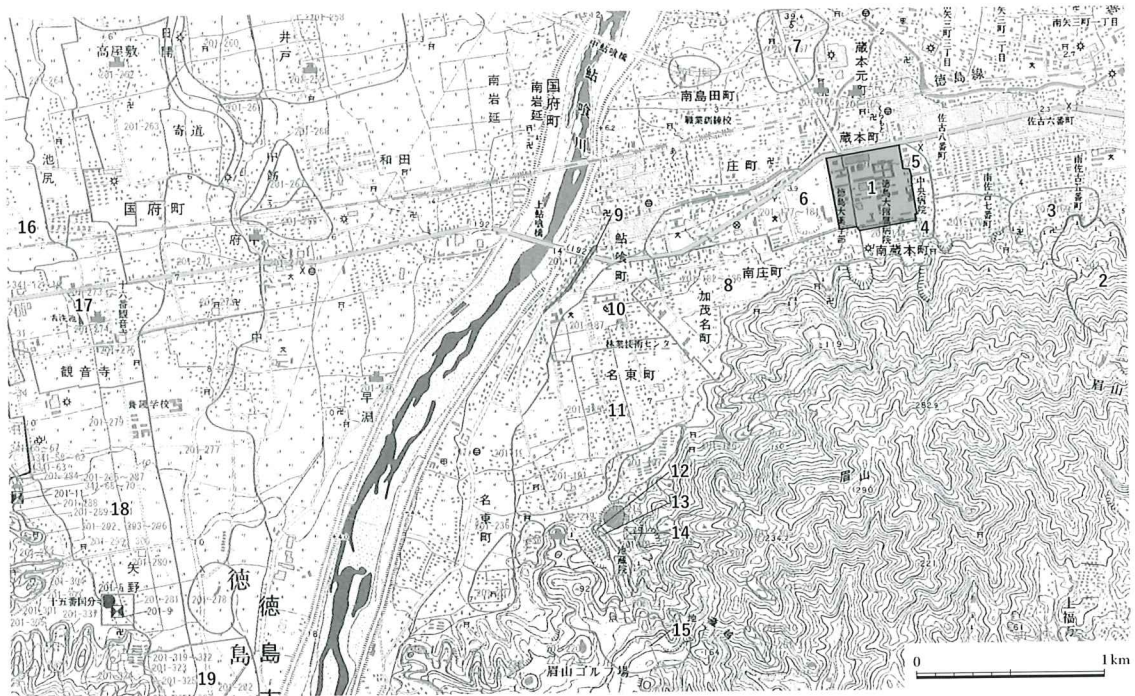


図1 庄・蔵本遺跡と周辺遺跡の位置

1. 庄・蔵本遺跡 2. 蜂須賀家万年山墓所 3. 三谷遺跡 4. 南蔵本遺跡 5. 蔵本遺跡 6. 庄遺跡 7. 中島田遺跡 8. 南庄遺跡 9. 袋井用水の水源地 10. 鮎喰遺跡 11. 名東遺跡 12. 節句山1号墳 13. 節句山2号墳 14. 穴不動古墳 15. 八人塚古墳 16. 敷地遺跡 17. 観音寺遺跡 18. 矢野遺跡 19. 延命遺跡 徳島県教委・徳島県埋文編(2006)をもとに作成。

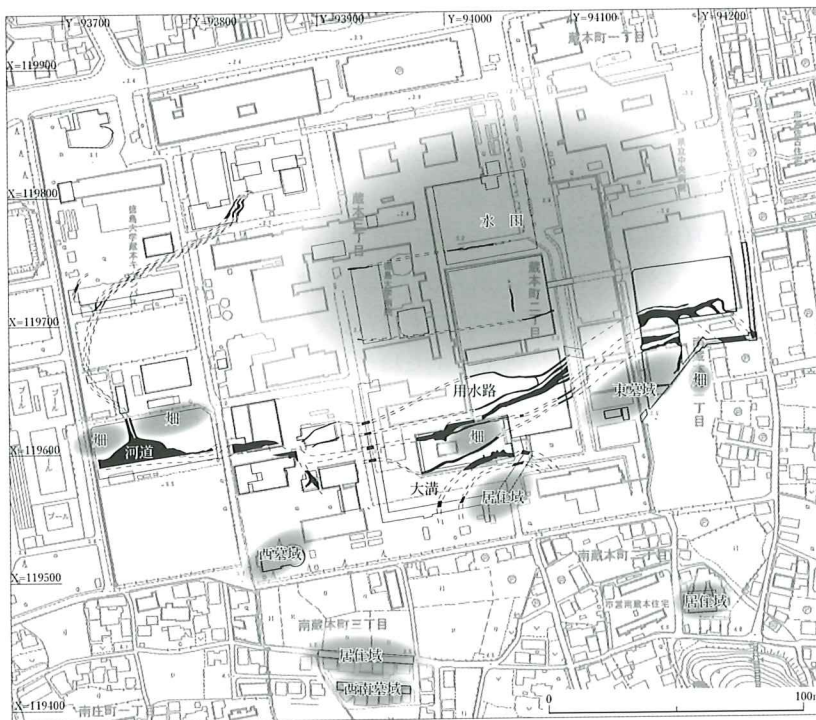


図2 弥生時代前期前葉～中葉における庄・蔵本集落一帯の様相(端野 2018より)

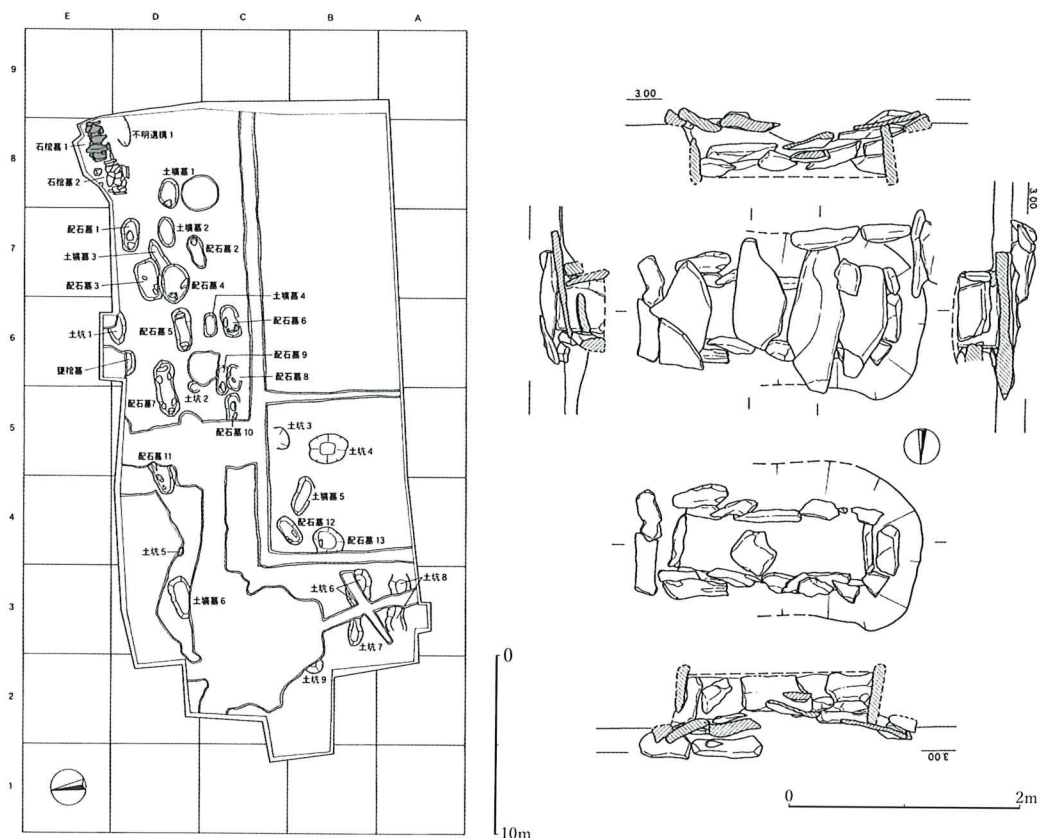


図3 庄・蔵本遺跡第6次調査地点の遺構配置と石棺（北條編 1998 より）

文時代晩期後葉～弥生時代前期)の型式を論じた際に、庄・蔵本遺跡の石棺を大別二型式のうちの一つ、「厚壁式」に該当するとみて、その系譜については響灘沿岸の「厚壁式」、あるいは北部九州の積石墓室の二つの可能性を提示した(端野 2021)。

以上、庄・蔵本遺跡の石棺に関する研究史を概観した。庄・蔵本遺跡の石棺の系譜は、その報告以来、遠くは朝鮮半島南部、日本列島では北部九州あるいは響灘沿岸地域に求められてきた。ところが、列島で当該期の石棺は、俎上に上がった地域以外にも分布しており、これらの地域の石棺も含めた型式学的研究が必要であった。近年、石棺の型式学的な検討を行った筆者は、庄・蔵本遺跡例についても系譜と受容の問題を論じた。ただ、列島西部の石棺を対象とする包括的な分析・議論に終始したこともあり、庄・蔵本遺跡例を個別に取り上げ、その特徴を深く言及し得なかった。そこで本稿では、端野(2021)の成果をふまえ、庄・蔵本遺跡の石棺の型式学的位置づけを試みたい。

2. 庄・蔵本弥生石棺の詳細

ここでは、庄・蔵本遺跡の石棺の詳細について、すでに刊行されている報告書(北條編 1998、端野編 2018)の内容にもとづき、確認しておきたい。なお、床面の計測値については、端野(2021)で行った結果を採用する。

第6次調査石塚墓1は、調査地点の北東部に位置する(図3)。壁面の構築法は側壁と小口壁とで

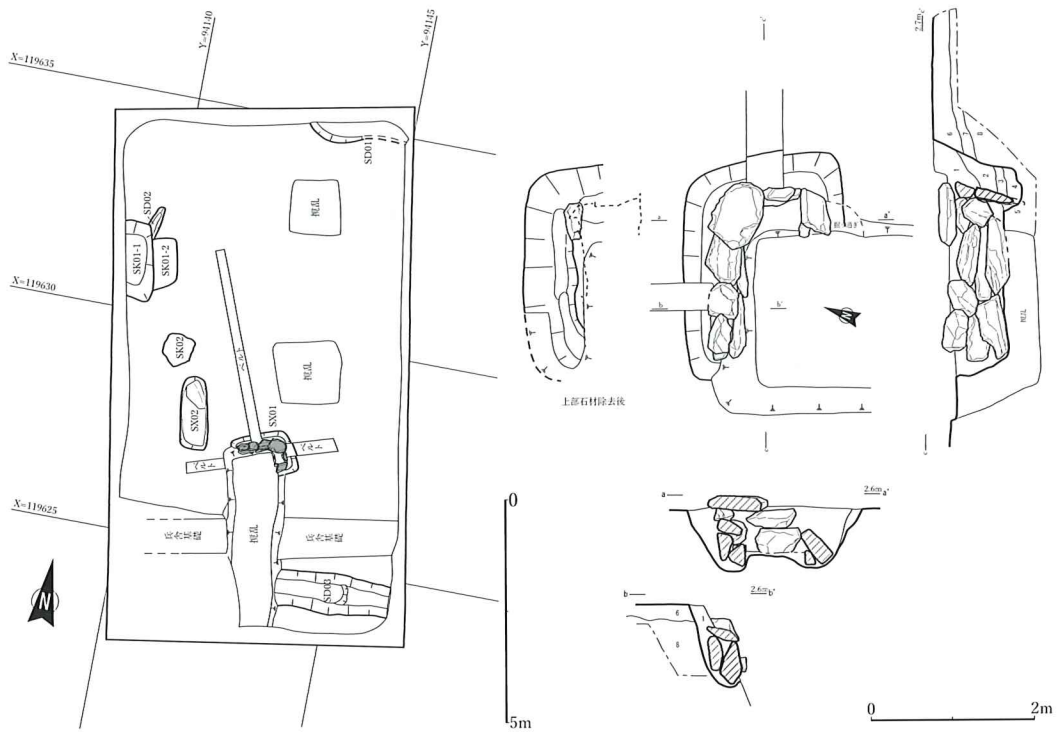


図4 庄・蔵本遺跡ボイラータンク地点の遺構配置と石棺（端野編 2018 より）

異なり、側壁では一部に1枚石を用いているものの、横積みの2～3段の部分が多い。いっぽう、小口壁は1枚石を立てることによってつくられている。床面では1個の石が検出されている。現代の攪乱により、蓋石の上部が破壊されているが、0.9～1.3mの板石4～5枚を横架して蓋とし、その間に0.1～0.3mの板石を置いて目張りとする。棺の長軸は東西方向で、床面は長さ161cm、幅52cmを測る。出土遺物はないが、所属時期は、同じ墓域に属するほかの墓の時期によって、弥生時代前期前葉～中葉と推定される。

ボイラータンク地点SX01は、調査地点の南側に位置する（図4）。大半が攪乱を受け、失われているが、墓壙の平面形は本来、長方形と推定される。墓壙の断面形は長軸・短軸ともに、逆台形状を呈する。石棺は、板状あるいは横長の石を2～3段積み上げて構築されている。石を横積みした北側の側壁とは異なり、西側の小口壁は板石を2段に立ててつくられている。棺材はすべて遺跡の南側に位置する眉山周辺で採取する緑色片岩である。側壁の東側上部には、蓋石の一部が残存していた。棺の長軸は東西方向で、床面は幅37cmを測る。出土遺物はないが、検出層位と第6次調査例との類似からみて、弥生時代前期前葉～中葉の可能性が高い。

3. 庄・蔵本弥生石棺の型式学的位置と系譜

庄・蔵本遺跡の石棺は、型式学的にどう評価されるのか、まず端野（2021）での成果を振り返っておこう。筆者は、列島西部の初期箱式石棺を対象に、属性分析により安定した分類単位を析出した。その結果、石棺内法の長さ（壁最大厚）との関係に不連続を見出し（図5）、「薄壁式」と

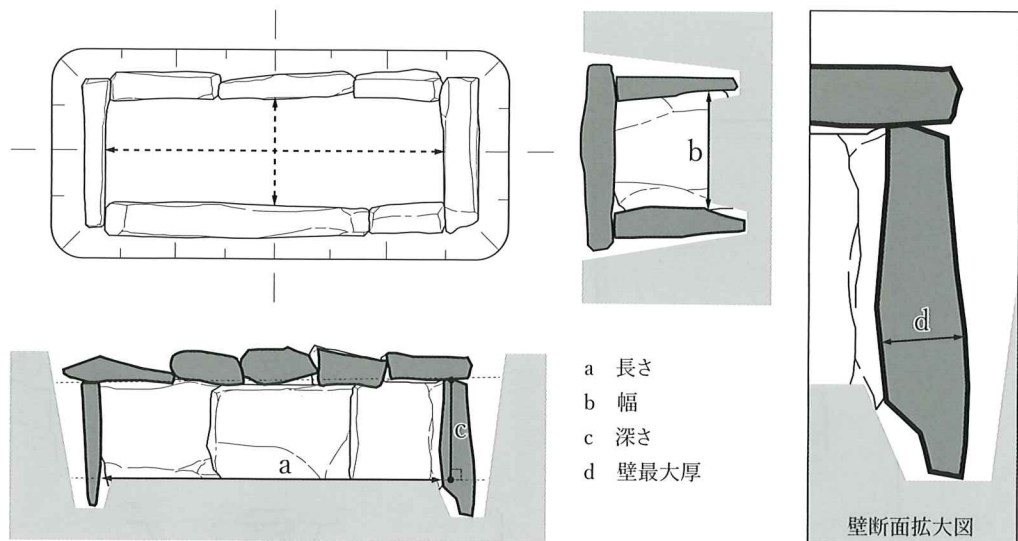


図5 石棺の計測位置（端野 2021 より）

「厚壁式」の二型式を設定した。「薄壁式」については、長さとは非計測的属性（床面の掘り込み、蓋石）との相関状況によって、Ⅰ～Ⅲに細別した。

図6-aは、列島西部の石棺を対象に作成した、長さとは壁最大厚の関係を示した散布図である。庄・蔵本遺跡の2例のうち、長さとは壁最大厚を計測し得た第6次調査例（★印）を落とし込んでいる。なお、計測値を含む個別のデータは表1の通りである。これによれば、第6次調査例は長さ・壁最大厚ともに大きい厚壁式に該当する一群に含まれる。ポイラータンク地点例は長さが明なため、図には落とし込めないが、壁最大厚が20cmで、大別型式の判別基準である13cmを超えているので、厚壁式に該当するとみてよい。

次に、非計測的属性についても検討しよう（図7・表2）。6次調査例で検討しうる非計測的属性は、平面形・構築法・蓋石・床石の四つである。平面形はC類で、これは薄壁式・厚壁式の双方に多くみられるものである（図6-b）。構築法はA2類で、これは厚壁式に多く見られるもので、薄壁式には極めて少ない（図6-c）。蓋石はA1類で、これは厚壁式に多くみられるもので、薄壁式には認められない（図6-d）。床石はB類で、厚壁式に多くみられるが、薄壁式にも一定量認められる（図6-e）。

以上のことから、構築法・蓋石の二属性において、6次調査例は厚壁式のもつ独自性を有するとみてよく、薄壁式とは明確に区別しうる。図に落とし込めないポイラータンク地点例は、床面掘り込みA1類・構築法A類で、とくに構築法A類は厚壁式に多くみられるものである。やはり厚壁式のもつ特徴を有するものとみてよい。

以上の点をふまえ、庄・蔵本遺跡の石棺の系譜について、再考しよう。図6-fは、各例の位置する地域を記号で示した散布図である。ここでの地域区分は端野（2021）にしたがう。これによれば、厚壁式例は、長崎北部・唐津・響灘沿岸・周防灘沿岸の広い範囲に分布するが、長崎北部・唐津は1例ずつにとどまり、分布の中心は響灘・周防灘沿岸である。こうした地域のうち、時期的にみて、系譜関係が想定しやすいのは、響灘沿岸の山口県中ノ浜遺跡例である。中ノ浜遺跡1次調査3号石棺の構築時期は、出土土器からみて、弥生時代前期中葉までさかのぼる（國分ほか1988）（図8）。これ

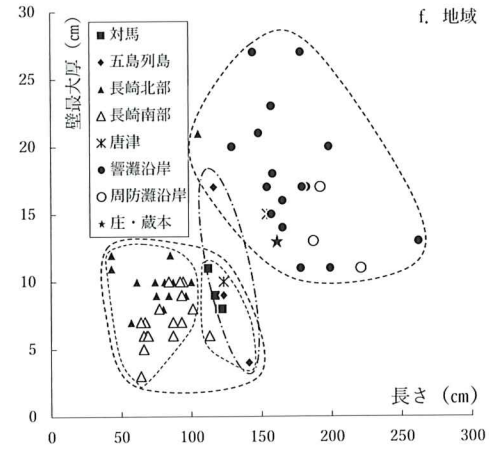
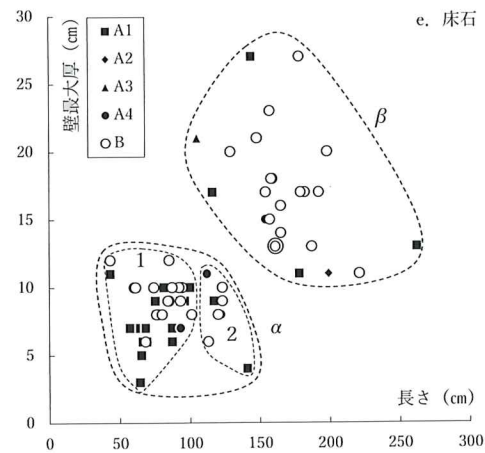
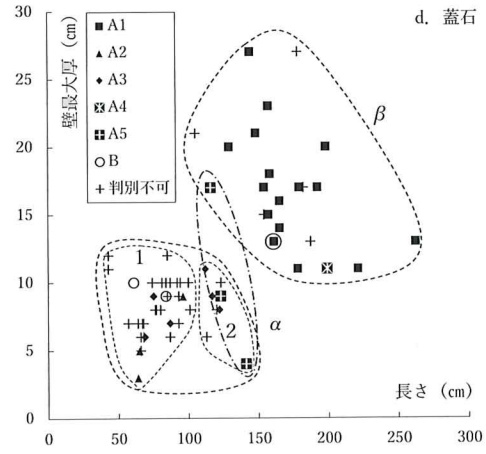
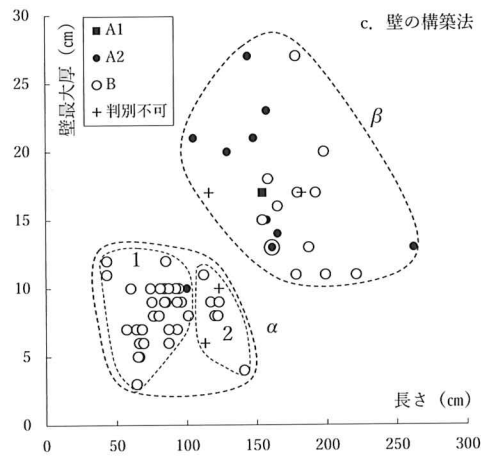
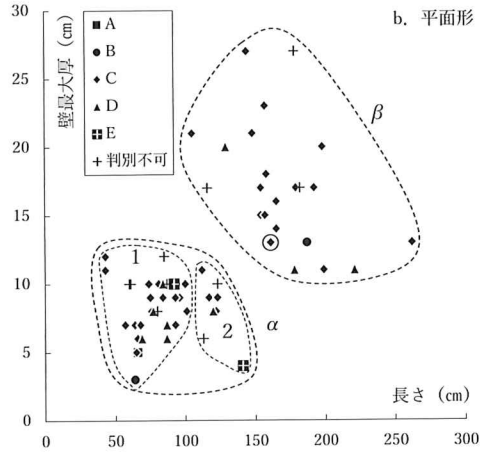
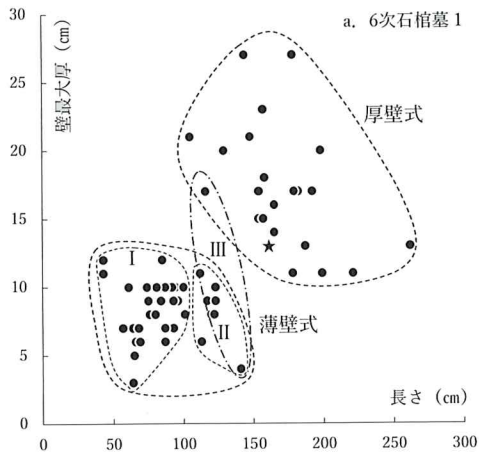


図6 長さ×壁最大厚と各項目の関係

表 1-1 分析対象一覧表

No.	地域	遺跡	次数・地点	遺構	時期	型式	長さ	幅	深さ	壁最大厚	平面形	掘り込み	構築法	蓋石	床石
1	対馬	中道壇		1号石棺	弥生前期前葉～後葉	薄壁Ⅱ	120	33	56	8	D	B	B	A3?	B
2	対馬	中道壇		2号石棺	弥生前期前葉～後葉	薄壁Ⅱ	112	48	34	11	C	A1	B	A3	A4
3	対馬	中道壇		4号石棺	弥生前期前葉～後葉	薄壁Ⅲ?	-	-	-	-	?	B	B?	?	A1
4	対馬	中道壇		5号石棺	弥生前期前葉～後葉	薄壁	-	-	-	4	?	B	B?	A3?	B
5	対馬	中道壇		6号石棺	弥生前期前葉～後葉	薄壁	-	-	-	6	?	A1	B?	?	A1?
6	対馬	中道壇		9号石棺	弥生前期前葉～後葉	薄壁	-	-	48	7	C?	A1	B?	?	A1?
7	対馬	中道壇		10号石棺	弥生前期前葉～後葉	薄壁Ⅱ	117	50	39	9	C	A1	B	A3	A1
8	対馬	中道壇		11号石棺	弥生前期前葉～後葉	薄壁Ⅱ	122	50	50	8	C	A1	B	A3	A4
9	対馬	中道壇		12号石棺	弥生前期前葉～後葉	薄壁	-	-	34	4	C?	A2	B?	A3?	A1
10	彦岐	小場		箱式石棺墓	弥生前期後葉	薄壁Ⅱ	138	53	41	-	D	?	B	A3	B
11	五島列島	宇久松原	04年度	SK025	弥生前期後葉～末葉	薄壁Ⅲ	141	45	29	4	E	A1	B	A5	A1
12	五島列島	宇久松原	04年度	SK027	弥生前期?	薄壁Ⅲ	104	59	26	-	?	A1	B	A5	A1
13	五島列島	殿寺		1号石棺墓	弥生前期後葉～末葉	薄壁	-	-	-	8	C?	A1	B?	A3?	A1?
14	五島列島	笛吹		1号石棺	弥生前期中葉	薄壁Ⅲ	116	-	38	17	C?	A1	B?	A5	A1
15	五島列島	笛吹		2号石棺	弥生前期中葉	薄壁Ⅲ	123	77	35	9	C	A1	B	A5	B
16	五島列島	笛吹		3号石棺	弥生前期中葉	薄壁	124	67	-	-	C?	A1	?	?	A1
17	五島列島	笛吹		4号石棺	弥生前期前葉	薄壁	101	66	-	-	C?	A1	?	?	A1
18	長崎北部	天久保	2次	2号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁Ⅰ	85	40	57	12	C?	B	B	A3?	B
19	長崎北部	天久保	2次	2号支石墓西石棺	縄文晩期後葉～末葉	薄壁Ⅰ	43	35	48	12	C	B	B	?	B
20	長崎北部	天久保	2次	3号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁Ⅰ	60	50	45	10	C?	B	B	A3	B
21	長崎北部	天久保	2次	6号石棺	縄文晩期後葉～末葉	薄壁Ⅰ	50	40	30	-	C?	A1	B	?	B
22	長崎北部	大野台	C地点	1号石棺	縄文晩期後葉～末葉	薄壁Ⅰ	57	43	47	7	C	B	B	?	A1
23	長崎北部	大野台	C地点	2号石棺	縄文晩期後葉～末葉	薄壁Ⅰ	68	-	48	7	C	B	B	?	A1
24	長崎北部	大野台	C地点	3号石棺	縄文晩期後葉～末葉	薄壁Ⅰ	43	32	46	11	C	B	B	?	A1
25	長崎北部	大野台	C地点	4号石棺	縄文晩期後葉～末葉	薄壁Ⅰ	76	29	41	8	C	B	B	?	B
26	長崎北部	大野台	C地点	5号石棺	縄文晩期後葉～末葉	薄壁Ⅰ	76	52	51	8	C	?	B	?	A1
27	長崎北部	大野台	C地点	6号石棺	縄文晩期後葉～末葉	薄壁Ⅰ	85	43	44	9	C	A1	B	?	B
28	長崎北部	大野台	C地点	7号石棺	縄文晩期後葉～末葉	薄壁Ⅰ	75	51	52	9	C	?	B	A3	A1
29	長崎北部	大野台	C地点	8号石棺	縄文晩期後葉～末葉	厚壁	105	35	36	21	C	B	A2	?	A3
30	長崎北部	大野台	E地点	5号遺構	縄文晩期後葉～末葉	薄壁Ⅰ	103	42	-	-	C?	?	B?	?	?
31	長崎北部	大野台	E地点	7号遺構	縄文晩期後葉～末葉	薄壁Ⅰ	92	45	-	-	C	?	B?	?	?
32	長崎北部	大野台	E地点	10号遺構	縄文晩期後葉～末葉	薄壁Ⅰ	100	45	-	-	D?	?	B	?	?
33	長崎北部	大野台	E地点	11号遺構	縄文晩期後葉～末葉	薄壁Ⅰ	100	62	-	-	C?	?	B?	?	?
34	長崎北部	大野台	E地点	18号遺構	縄文晩期後葉～末葉	-	-	30	-	-	C?	?	B	A	?
35	長崎北部	大野台	E地点	19号遺構	縄文晩期後葉～末葉	薄壁Ⅰ	102	43	-	-	C	?	B	?	?
36	長崎北部	大野台	E地点	20号遺構	縄文晩期後葉～末葉	薄壁Ⅰ	95	48	-	-	C	?	B	?	?
37	長崎北部	大野台	E地点	24号遺構	縄文晩期後葉～末葉	薄壁Ⅰ	90	53	-	-	E	?	B	?	?
38	長崎北部	大野台	E地点	28号遺構	縄文晩期後葉～末葉	薄壁Ⅰ	95	51	-	-	C?	?	B?	?	?
39	長崎北部	大野台	E地点	31号遺構	縄文晩期後葉～末葉	薄壁Ⅰ	78	51	-	-	E	?	B	?	?

表 1-2 分析対象一覧表

No.	地域	遺跡	次数・地点	遺構	時期	型式	長さ	幅	深さ	壁最大厚	平面形	掘り込み	構築法	蓋石	床石
40	長崎北部	大野台	E地点	32号遺構	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	40	15	-	-	D	?	B	?	?
41	長崎北部	大野台	E地点	34号遺構	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	82	-	-	-	D	?	B?	?	?
42	長崎北部	四反田		石棺墓	弥生前期中葉	薄壁 I	93	-	50	9	C	A1	B	?	A1
43	長崎北部	出津		1号石棺	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	74	48	47	10	C	B	B	?	B
44	長崎北部	狸山		5号	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	65	35	48	-	C	?	B	A2	B
45	長崎北部	狸山		6号	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	103	-	48	-	D	?	A2	A3	A1
46	長崎北部	狸山		7号	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	60	38	50	-	D	?	B	A2?	A1
47	長崎北部	小川内		1号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁	-	65	45	8	C?	B	B	?	A1
48	長崎北部	小川内		2号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	87	48	53	10	C?	B	B	?	B
49	長崎北部	小川内		3号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	81	48	51	10	C	B	B	?	A1
50	長崎北部	小川内		4号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	100	-	48	10	C	B	A2	?	A1
51	長崎北部	小川内		5号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	80	38	56	8	C?	B	B	?	B
52	長崎北部	小川内		6号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	96	53	47	9	C	B	B	A2	A1
53	長崎北部	小川内		7号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	84	37	49	9	C	B	B	B	B
54	長崎北部	小川内		8号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	65	58	45	5	C	B	B	A2	A1
55	長崎北部	小川内		9号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	61	50	24	10	C?	B	A2	B	B
56	長崎北部	小川内		10号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁	-	-	-	8	?	B?	B?	?	B?
57	長崎南部	原山	79・80年度	5号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁	-	-	47	10	C?	A2	B?	?	B
58	長崎南部	原山	79・80年度	6号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	66	28	33	6	C	A1	B	?	A1
59	長崎南部	原山	79・80年度	9号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	93	48	45	9	C	A1	B	?	B
60	長崎南部	原山	79・80年度	13号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁	-	-	-	6	?	A2	B?	?	B
61	長崎南部	原山	79・80年度	19号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	101	45	39	8	C	A1	B	?	B
62	長崎南部	原山	79・80年度	20号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	92	52	57	10	C	A1	B	?	B
63	長崎南部	原山	79・80年度	21号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	94	41	44	10	C	A1	B	?	B
64	長崎南部	原山	79・80年度	24号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	67	46	36	7	C	A1	B	?	A1
65	長崎南部	原山	79・80年度	25号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	93	66	45	7	C	A1	B	?	A4
66	長崎南部	原山	79・80年度	29号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	84	44	42	10	D	A1	B	?	A1
67	長崎南部	原山	79・80年度	30号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	68	35	34	6	C	A1	B	?	B
68	長崎南部	原山	79・80年度	31号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	77	43	39	8	D	A1	B	?	B
69	長崎南部	原山	79・80年度	37号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁	-	32	31	8	C?	A1	B?	?	A1?
70	長崎南部	原山	79・80年度	39号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	87	42	58	6	D	A1	B	?	A1
71	長崎南部	原山	79・80年度	40号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	64	50	37	7	C	A1	B	?	A1
72	長崎南部	原山	79・80年度	41号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	92	56	47	10	E	A1	B	?	B
73	長崎南部	原山	79・80年度	43号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 II	113	55	36	6	C?	A1	B?	?	B
74	長崎南部	原山	79・80年度	104号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	90	49	44	-	C	?	B	?	B
75	長崎南部	原山	79・80年度	106号支石墓	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	87	40	30	-	E	?	B	?	B
76	長崎南部	西鬼塚		2号箱式石棺	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	87	43	49	7	D	A2	B	A3	A1
77	長崎南部	西鬼塚		3号箱式石棺	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	64	32	31	3	B	A1	B	A2	A1
78	長崎南部	西鬼塚		4号箱式石棺	縄文晩期後葉～末葉	薄壁 I	69	28	30	6	D	A1	B	A3	A1

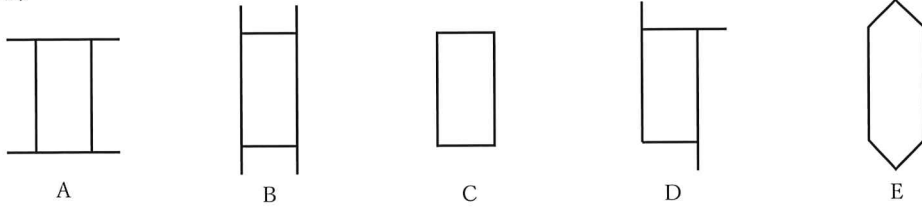
表 1-3 分析対象一覧表

No.	地域	遺跡	次敷・地点	遺構	時期	型式	長さ	幅	高さ	壁最大厚	平面形	掘り込み	構築法	蓋石	床石
79	長崎南部	西鬼塚		5号箱式石棺	縄文晩期後葉 ～末葉	薄壁 I	66	30	20	5	A	A1	B	?	A1
80	長崎南部	風親岳	C地点	28号支石墓	縄文晩期後葉 ～末葉	薄壁 I	64	38	54	-	C	?	B	A3	A1
81	長崎南部	風親岳	D地点	30号支石墓	縄文晩期後葉 ～末葉	薄壁 I	58	27	48	-	C	?	B	A3	B
82	長崎南部	風親岳	D地点	31号支石墓	縄文晩期後葉 ～末葉	薄壁 I	68	44	47	-	D	?	B	A3	B
83	長崎南部	風親岳	D地点	33号支石墓	縄文晩期後葉 ～末葉	薄壁 I	63	30	40	-	D	?	B	A3?	B
84	長崎南部	風親岳	D地点	34号支石墓	縄文晩期後葉 ～末葉	薄壁	-	39	68	6	D?	?	B	A3?	A1?
85	長崎南部	風親岳	D地点	35号支石墓	縄文晩期後葉 ～末葉	薄壁 I	82	34	47	-	D	?	B	A3	A1
86	唐津	大友	3次	3号墓	弥生前期末葉?	薄壁 II	123	45	41	10	C?	A1	B?	?	B
87	唐津	瀬戸口		7号支石墓	縄文晩期後葉 ～末葉?	厚壁	154	60	69	15	C	B	B	?	A4
88	響灘沿岸	梶栗浜	1957年	a石群下位石棺	弥生前期末葉	厚壁	144	33	28	27	C	A2	A2	A1	A1
89	響灘沿岸	梶栗浜	1957年	c石群下位石棺	弥生前期末葉	厚壁	157	42	30	15	C	A1?	A2	A1	B
90	響灘沿岸	梶栗浜	1957年	e石群下位石棺	弥生前期末葉	厚壁	178	59	33	11	D	A1	B	A1	A1
91	響灘沿岸	小倉城二ノ丸		石棺墓IV-1	弥生前期末葉 ～中期初頭	厚壁	262	52	36	13	C	A1	A2	A1	A1
92	響灘沿岸	小倉城二ノ丸		石棺墓IV-3	弥生前期末葉 ～中期初頭	厚壁	129	39	32	20	D	A1?	A2	A1	B
93	響灘沿岸	小倉城二ノ丸		石棺墓IV-4	弥生前期末葉 ～中期初頭	厚壁	-	40	63	20	?	?	B?	?	B
94	響灘沿岸	小倉城二ノ丸		石棺墓IV-5	弥生前期末葉 ～中期初頭	厚壁	182	44	29	17	C?	A2	B?	?	B
95	響灘沿岸	小倉城二ノ丸		石棺墓IV-6	弥生前期末葉 ～中期初頭	厚壁	199	34	26	11	C	A1	B	A4	A2
96	響灘沿岸	小倉城二ノ丸		石棺墓IV-7	弥生前期末葉 ～中期初頭	厚壁	178	44	48	27	C?	A1	B	?	B
97	響灘沿岸	中ノ浜	1次	1号石棺	弥生前期末葉	厚壁	159	53	56	18	C	A1?	A2	A1	B
98	響灘沿岸	中ノ浜	1次	2号石棺	弥生前期末葉 ～中期前半	厚壁	158	48	48	18	C	A1?	B	A1	B
99	響灘沿岸	中ノ浜	1次	3号石棺	弥生前期中頃 ～末葉	厚壁	157	43	44	23	C	A1	A2	A1	B
100	響灘沿岸	中ノ浜	1次	6号石棺	弥生前期末葉 ～中期初頭	厚壁	165	43	38	14	C	A1	A2	A1	B
101	響灘沿岸	中ノ浜	1次	7号石棺	弥生前期末葉	厚壁	165	54	40	16	C	A1?	B	A1	B
102	響灘沿岸	中ノ浜	3次	E-1箱式石棺	弥生前期末葉	厚壁	154	45	49	17	C	A2?	A1	A1	B
103	響灘沿岸	中ノ浜	3次	E-2箱式石棺	弥生前期末葉	厚壁	148	48	41	21	C	A1	A2	A1	B
104	響灘沿岸	中ノ浜	9次	ST901	弥生前期末葉 か中期	厚壁	179	72	43	17	C	A1	B	A1	B
105	響灘沿岸	中ノ浜	9次	ST903	弥生前期後半	厚壁	198	53	40	20	C	A1	B	A1	B
106	周防灘沿岸	下清水		1号石棺墓	弥生前期末葉 ～中期前半	厚壁	187	49	36	13	B	A1	B	A1?	B
107	周防灘沿岸	下清水		4号石棺墓	弥生前期末葉 ～中期前半	厚壁	221	56	37	11	D	A1	B	A1	B
108	周防灘沿岸	下清水		5号石棺墓	弥生前期末葉 ～中期前半	厚壁	192	58	36	17	C	A1	B	A1	B
109	周防灘沿岸	下稗田	4次 I 地区	1号石棺墓	弥生前期～中期	厚壁	174	50	35	-	C?	A1	B	A1	B
110	徳島	庄・蔵本	6次	石棺墓1	弥生前期前葉 ～中葉	厚壁	161	52	44	13	C	A1?	A2	A1	B
111	徳島	庄・蔵本	98年度立会	SX01	弥生前期前葉 ～中葉	厚壁	-	37	30	20	C?	A1	A	?	B?

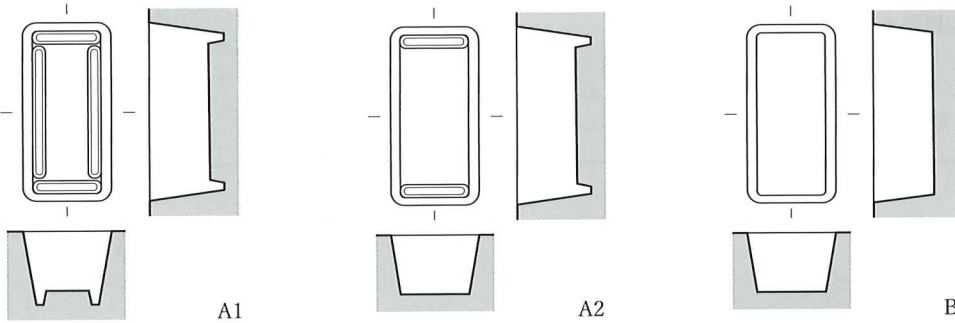
*各表の文献は端野(2021)を参照されたい。

は庄・蔵本遺跡例とほぼ同時期の所産とみてよいだろう。平面形C類・床面掘り込みA1類・構築法A2類・蓋石A1類・床石B類で構成され、庄・蔵本遺跡の例とも共通点する属性からなる。さらに、この例の小口壁は板石1枚を立ててつくられており、板石を立てて壁をなしている点で、庄・蔵本遺

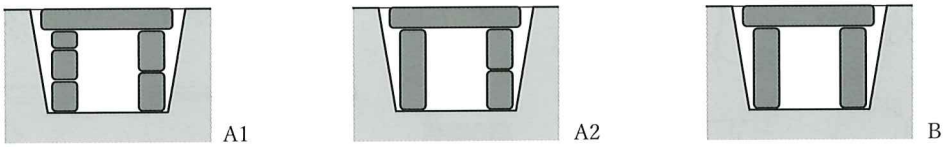
〔平面形〕



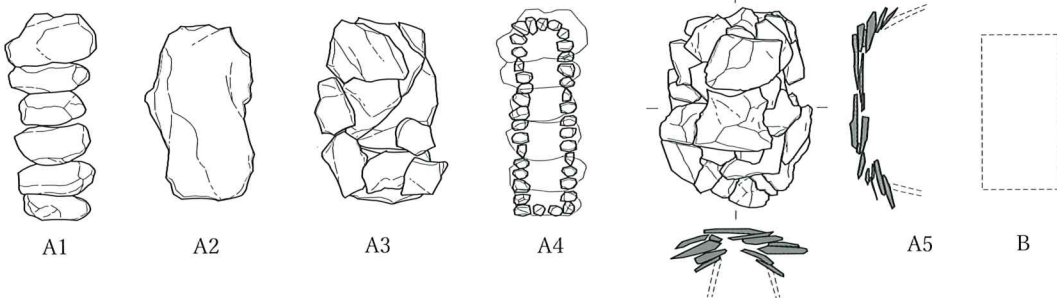
〔床面の掘り込み〕



〔壁の構築法〕



〔蓋石〕



〔床石〕

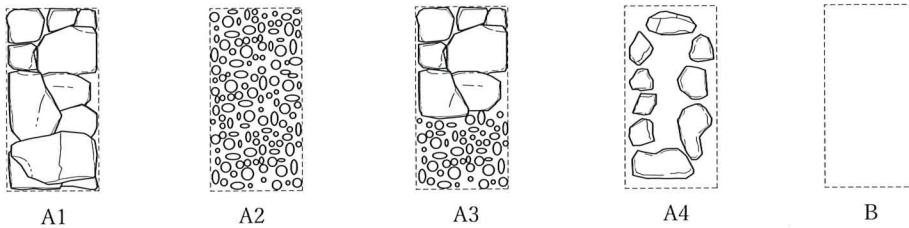


図7 非計測的属性の変異 (端野 2021 より)

表2 非計測的屬性一覧表（端野 2021 より）

平面形

- A：両小口壁が両側壁より突出するもの。
- B：両側壁が両小口壁より突出するもの。
- C：小口壁・側壁ともに突出せず、箱形をなすもの。
- D：A・B・Cが混在するもの。
- E：五～六角形をなすもの。

床面の掘り込み

- A1：小口壁・側壁下部に掘り込みを有するもの。
- A2：小口壁下部に掘り込みを有するもの。
- B：なし。

壁の構築法

- A1：側壁の全てが2段以上の積石で構築されたもの。
- A2：壁の一部が2段以上の積石で構築されたもの。
- B：壁の全てが1段の石で構築されたもの。

蓋石

- A1：数枚の板石を横架けして蓋石とするもの。
- A2：1枚の板石を用いて蓋石とするもの。
- A3：数枚の板石を不規則に重ねて蓋石とするもの。
- A4：壁の上部に、転石や割石を1～2段程度積み上げ、蓋石をかけるもの。
- A5：壁の上部から板石を持ち送り状に重ねてせり立たせ、アーチ状の蓋石をなすもの。
- B：なし（支石墓の上石が蓋石を兼ねる）。

床石

- A1：1～数枚の板石からなる床石を有するもの。
- A2：床面に礫を敷き詰めたもの。
- A3：板石と礫からなる床石を有するもの。
- A4：床面に間隔をあけて塊石・板石を配したのもの。
- B：なし。

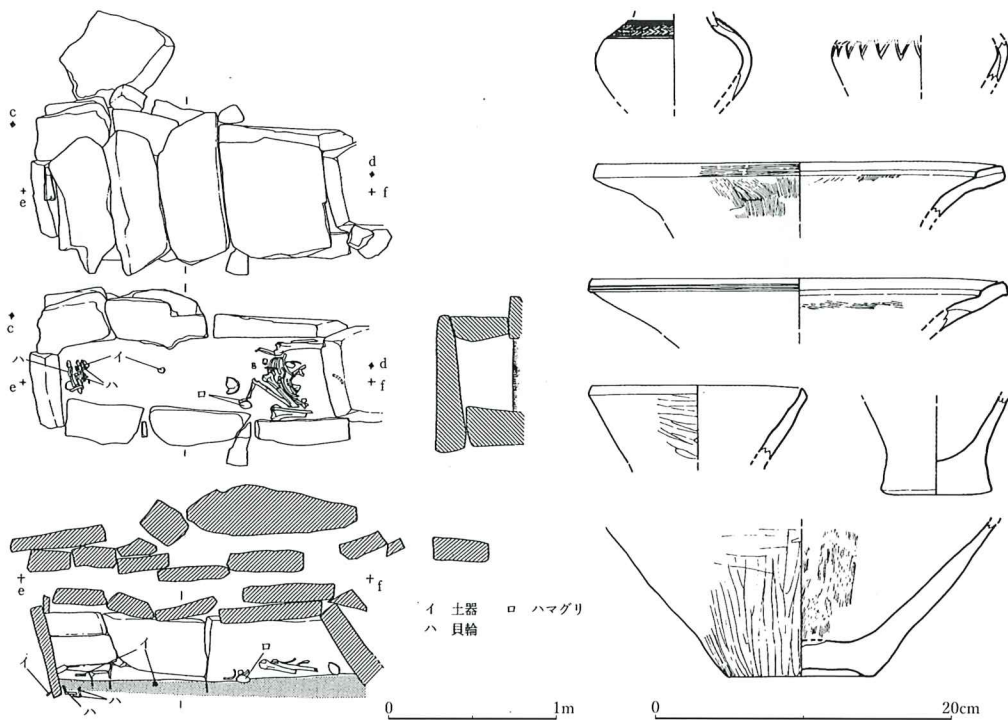


図8 中ノ浜遺跡1次調査3号石棺と出土土器（國分ほか 1988 より）

跡例とも共通する。

もう一つの可能性として、橋本達也（2001）が指摘した福岡県田久松ヶ浦遺跡の石槨墓がある。この遺跡では、SK206とSK218の2基の石槨墓が確認されている（原編 1999）。端野（2021）では、これらの石槨墓を、響灘沿岸以東の厚壁式の祖型候補とみた。内部に削り抜き式木棺の存在が想定さ

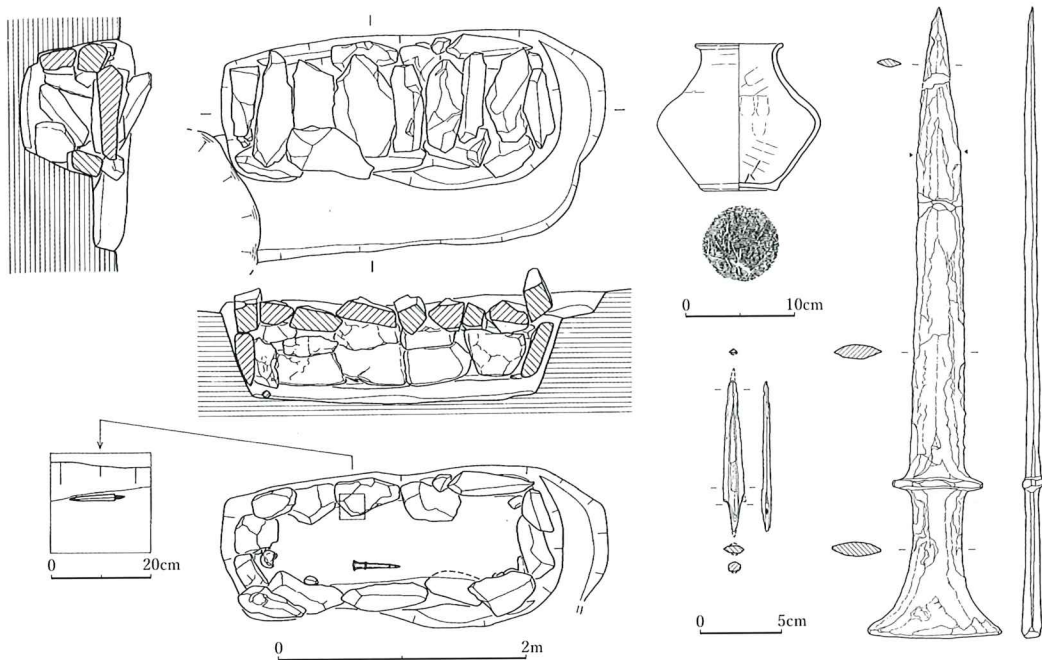


図9 田久松ヶ浦遺跡 SK206 と出土遺物（原編 1999 より）

れる点で、石棺とは異なるものの、壁の厚さ、内法の長さ、平面形・構築法・蓋石は厚壁式と類似している。筆者の壺形土器編年（端野 2016）からみれば、SK206 は弥生時代前期初葉～前葉（板付 I 式期）、SK218 は縄文時代晩期末葉（夜白 II 式期）に位置づけられる。このうち、庄・蔵本例と時期的に近いのは SK206 である（図 9）。SK206 は先述の特徴に加え、小口は板石を立てて壁をつくっている点で、庄・蔵本遺跡例と類似している。

以上のことから、庄・蔵本遺跡例の系譜を、響灘沿岸の厚壁式石棺、あるいは北部九州宗像地域の石槨墓に求めておきたい。前者の場合は厚壁式をほぼそのまま受容したこととなり、後者の場合は石槨墓の壁体のみを採用して厚壁式石棺となったと理解される。

おわりに

以上、庄・蔵本遺跡の型式学的位置づけを試みた。その結果、端野（2021）のいう厚壁式石棺に該当することが改めて確かめられ、その系譜を響灘沿岸の石棺、あるいは北部九州の石槨に求めた。こうした石棺の出現は、弥生土器の出現と時を同じくする。北部九州の板付 I 式土器が、それ以前に形成されたコミュニケーション・システムを背景として、列島西部各地へと伝播し、弥生土器の母胎となったとする見解（田中 1986）がある。庄・蔵本遺跡一帯でも板付 I 式に類似する土器が散見されており（端野 2018）、徳島平野での石棺の出現もこの脈絡から理解することが可能である。石棺などの石を用いた墓制は、しばらくすると姿を消し、土壙墓（木棺墓）が中心となる（端野 2018）。こうした変化は、北部九州などの西方地域の色彩が強い弥生時代開始当初の文化が（中村 1998）、次第に独自性を高めていくプロセスの表れと理解されようか。この理解を成立させるためには、ほか

の文化要素との関係を視野に入れた文化構造変動の検討が不可欠であるが、紙数が尽きてしまった。稿を改めて論じることとしたい。

註

1. 庄・蔵本遺跡第6次調査では、古墳時代前期末～中期の可能性のある石棺墓が確認されている（北條編 1998）。これと区別するため、本稿では弥生時代に属する石棺を「弥生石棺」と呼称する。
2. 山口県中ノ浜遺跡、梶栗浜遺跡の石棺は、庄・蔵本遺跡のそれよりも後出し、そのルーツを響灘沿岸地域に求めることはできないとしたが、これは誤りである。庄・蔵本例とほぼ同時期の弥生時代前期中葉までさかのぼる可能性がある中ノ浜遺跡1次調査3号石棺（國分ほか 1988）の存在を見落としていた。これをふまえ、端野（2021）では見解を改めた。

文献

- 河野雄次 1998 「調査成果のまとめ」『庄・蔵本遺跡1』徳島大学埋蔵文化財調査室、54-55 頁
- 國分直一・伊東照雄・木下尚子 1988 「中ノ浜遺跡の弥生時代前期埋葬—第1次調査報告—」『地域文化研究』3、3-46 頁
- 近藤玲 2000 「徳島県の弥生時代における墓制について」『論集 徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会、413-428 頁
- 田中良之 1986 「縄文土器と弥生土器 1. 西日本」『弥生文化の研究3』雄山閣出版、115-125 頁
- 徳島県教育委員会文化財課・徳島県埋蔵文化財センター編 2006 『徳島県遺跡地図』徳島県教育委員会文化財課・徳島県埋蔵文化財センター
- 中村豊 1998 「稲作のはじまり—吉野川下流域を中心に—」『川と人間—吉野川流域史—』溪水社、79-100 頁
- 端野晋平 2016 「板付I式成立前後の壺形土器—分類と編年の検討—」『考古学は科学か 田中良之先生追悼論文集』中国書店、325-349 頁
- 端野晋平 2018 「庄・蔵本遺跡一帯における弥生時代前期墓制の検討」『庄・蔵本遺跡3』徳島大学埋蔵文化財調査室、91-116 頁
- 端野晋平 2021 「初期箱式石棺の二型式—薄壁式と厚壁式—」『持続する志 岩永省三先生退職記念論文集』中国書店、79-102 頁
- 端野晋平編 2018 『庄・蔵本遺跡3』徳島大学埋蔵文化財調査室
- 橋本達也 2001 「弥生時代前期朝鮮系無文土器の展開と徳島」『青山考古』18、167-176 頁
- 原俊一 1999 「まとめ」『田久松ヶ浦』宗像市教育委員会、21-31 頁
- 原俊一編 1999 『田久松ヶ浦』宗像市教育委員会
- 北條芳隆 1998 「弥生時代前期集団墓の構造」『庄・蔵本遺跡1』徳島大学埋蔵文化財調査室、133-141 頁
- 北條芳隆編 1998 『庄・蔵本遺跡1』徳島大学埋蔵文化財調査室

【補記】

2021年9月24・29日および10月4日、庄・蔵本遺跡のすぐ南東に位置する南蔵本遺跡（徳島県立中央病院 ER 棟地点）で確認された弥生時代前期前葉の石棺を見学することができた。壁の一部に、この時期の突帯文土器を用いており、庄・蔵本遺跡一帯では、石棺の所属時期を細かく確定し得た、初めての例である。床面からは朱が検出された。正式報告をまって検討したい。快く現場を見学させていただいた西本和哉氏（徳島県埋蔵文化財センター）に感謝したい。